

[5] 舞踊が試される日

～ビデオ時代、本物だけが生き残る～

1990年2月2日 東京新聞 夕刊

かつて印刷術が発明されて、文学は非常な変化をこうむった。活字という風が、作品を地上いたる所へ運んでいった。それまでは、物語の好きな人が、一字一字丹念に書き写すか、語りの上手な人のまわりに集まって耳を傾けるしかなかったから、文学は一部のごく恵まれた人たちの占有物でしかなかったし、書物は途方もない貴重品だった。

それから長い時がながれ、いま自分用の書架に本を持つていない人は珍しい。

レコードが発明されて、音楽が一般大衆という広い支え手を持つようになったのも、まだつい最近のことである。それまでは、公開コンサートはあってもそう多くはないし、その間のアルバイトとして、あるいは公演に出られるようになるまでのステップとして、若い優秀な音楽家達の主な活躍の場は、貴族は大金持ちの社交界だった。パーティーでの、いわば余興である。

そこに集う上流の人々のなかに自分の芸術を愛し、庇護し、後援してくれるパトロンをみつけることができるか否か、将来の名声は、ただこの一点に懸かっていたといっても言い過ぎではない。十九世紀末から二十世紀初頭へかけてのフランス上流社会を描いたブルーストの『失われた時を求めて』には、そうした事情がつぶさに語られている。

しかしいま、音楽家を支えるのは、一般大衆である。大パーティーに招かれる望みは薄くても、ラジオのFMで聴いた一枚のレコードを買うことはできる。その音楽家が演奏会を開けば、行って実物に接することができる。家に帰って、またレコードを聴き、感動をいっそう深めることができる。なんとこの贅沢をわれわれは手にしていることだろうか。

カラー写真ができるまえの画家もまた、肖像画描きと

[5] 舞踊が試される日 ～ビデオ時代、本物だけが生き残る～

1990年2月2日 東京新聞 夕刊

して、ないしは室内装飾家として、王侯貴族にのみ奉仕するものだった。だから、聖書や神話を題材にしたすべての絵に、ひたすらパトロンであるメデイチ家の憧れの奥方を描きつづけて、それで幸福だった（と誰に分かるう？）ポツティチェルリのような画家もいるけれども、醜いものは醜いのだと、スペイン王の姉君のありのままの姿を描いてご不興をこうむったゴヤのような画家もあった。

いずれにしても、どんな状況でも、本物の芸術家はおのれの理想と意地を貫き、そして本物の芸術だけが時代の波をくぐり抜けてあまねく広がり、数えきれない人々の心を豊かにした。

それにしても、もしカラー写真というものがなくて、一度も画集を見たことがなかったら、モネの『睡蓮』と聞いても何の思いも湧かず、海を渡ってクールベの絵が来ると知っても、わざわざ見にでかける気にはならないだろう。実物を見て、やはり本物はちがうと感動を新たにし、批評を読んで、絵画一般への認識を深めたりはしないに違いない。

そしていま、ビデオという新技術が一般的なものになりつつある。この技術は、いったいどういう芸術を変革しようとしているのだろうか。これまで手の届かないところにあつたいかなる芸術を、われわれに近づけようとしているのだろうか。そして、それに携わる芸術家を解放し、高めようとしているのだろうか、それはおそらく舞台芸術、わけても舞踊であると思われる。

舞踊が人間にとっていかに深い衝動であるかということとは、幼児を見ればすぐに分かることである。まわりを跳ね回る兄の動きを目で追って、まだ立つことのできな

い弟が上体を揺すって喜ぶ。また、『旧約聖書』『古事

[5] 舞踊が試される日

～ビデオ時代、本物だけが生き残る～

1990年2月2日 東京新聞 夕刊

記』『千夜一夜』『源氏物語』、どれをとっても、舞踊によって人間の生の深まりと昂まりが語られていないものはない。

しかもなお、その本質に迫ることが難しいのは、これが瞬時にして消え失せる幻のような芸術で、なんとしても定着しがたいもの、それゆえにほぼど見慣れた眼を持たないでは識別しがたいものだったからである。そう、ちやうどレコード以前の音楽がそうであったように。

その結果、舞踊は今日、あまりに限られたひとびとのものでしかない。またあまりにレベルの低い理解と評価しか与えられていない。舞踊という芸術が要求する幾多の厳しい条件にくらべて、それはいかにも嘆かわしい状況である。

そのような状況をビデオはおそらく変えるだろう。それは必然的な変化であるに違いない。かつて活字が文学を変えたように、レコードが音楽を変えたように、そして写真が絵画を変えたように。

しかし、振り返って思えば、その様な変化にしっかりと対応しうるだけのものを、舞踊家自身は持っているだろうか。それだけの自覚を備えているだろうか。画期的な変化に際してはいつも生き残るものと滅びるものの二手に分かれる。ビデオという新しい技術をこれまでの技術や知識の独占に対する脅威とみたり、芸の安売りとして軽蔑したり、あるいは劇場への客足を止めるのではないかとの懸念から排除するべきではない。

芸術はつねにできるかぎり大きな大衆に支えられる必要がある。そうでなくては芸術は芸術たりえず、また芸術家の自立も難しい。そして、真の大衆化というのは、けっして芸の格を下げることではない、格の高い芸を正しく理解しうる人の数をふやすことだということを、舞

〔5〕 舞踊が試される日
～ビデオ時代、本物だけが生き残る～

1990年2月2日 東京新聞 夕刊

踊家は本気で考え、今こそその方策を練るべきではないだろうか。